





石
清
井上靖

新潮社



© Fumi Inoue 1991,
Printed in Japan

石 濤
せき とう

平成三年 六月二十五日 発行
平成三年 八月五日 四刷

著 者 井上 靖
いのうえ やすし

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部〇三三二六六一五一一
編集部〇三三二六六一五四二二

振替 東京 四一八〇八番

印刷 二光印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落し本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格は函に表示しております。

ISBN 4-10-302511-5 C0093

目次

石 濤…………… 5

川の畔り…………… 41

炎…………… 97

ゴー・オン・ボーイ…………… 129

生きる…………… 161

装画
石 濤

「山水精品册」

「黄山图卷」

泉屋博古馆藏

石

濤

——井上靖短篇小說集——

石
濤

昨年という年ですか。まあ、さしたることもなく過した一年と言えましょう。私は未年生ひつじれで、暦をみると八方塞がり、何をやっても、もう少しのところであまくゆかない、そういう年だということでしたので、何となくそういう気持ちになつていたのですが、別にこれといって道を塞がれて困つたということもなかつたように思います。格別いいこともありませんでしたが、まあ大過なく過したと言えましょうか。

そう、丁ひのとの未ひつじですから、おっしゃる通り今年は五月の誕生日を迎えると、満で七十三歳になります。もう誰も若いとは言つてくれません。でも、今のところは特にどこが悪いというようなどころもないようで、短い外国旅行にも出て

いますし、酒量もさして落ちてはおりません。しかし、酒はもう慎まないといけませんな。慎もうとは思っておりますが、それがなかなか慎めない。夜、仕事を終えてからウイスキーを飲むのが日課の一つになって、三十何年か続いています。仕事がない時は銀座あたりで飲みますね。いずれにしても今年あたりから慎みませんと。

そうですね、老化ですか。老化というものからは免れ得ませんね。自分では老化していませんつもりですが、争えないもので、やはり体全体に老いが来ていると言わなければならぬでしょう。大体、アレルギーなどというものは――。

いま、昨年一年、変ったことはなかったと申しましたが、そうですね、アレルギーがありますな。これまでアレルギーというものがどういうものか、全く知らないで過して来たのですが、昨年はひどい目に遇いました。そもその始りは、一昨年の暮のパキスタン旅行の折、ラルカナという田舎町の宿で蟲にさされたことにあるのではないかと思えます。蟲にさされたところが米粒ほどの黒い斑点になり、そこがいつまでも痒かった！ どうもその頃から徐々にアレ

ルギーの初期症状が現われ出したように思います。と言って、アレルギーの責
任のすべてを、パキスタンの小さい蟲に背負わせる気持はありません。やはり、
老化なるものの然らしむるところなんでしょうね。

そうは言っても、もちろん、アレルギーと老化とは直接結びつきません。若
い人でも、幼い者でも、アレルギー体質の人はあり、普通、そうした体質の人
は食物とか、花粉とか、匂いとか、そういうものに刺戟されて、皮膚の一部が
痒くなり、かくとそれがどこまでも拡がってゆく。ところが、私の場合はどう
も、そうした刺戟とは無関係のようです。刺戟なしに、いつでも全身の皮膚は
そうした状態に移行できる、謂ってみれば、まあ、抵抗の利かない衰えの状態
にあるんでしょうな。パキスタンの小さい蟲の与り知らぬことに違いありませ
ん。去年初めてアレルギーなるものの洗礼を受けました。辛いものですね。

それからもう一つ、この方は老化とは直接結びつきませんが、それと全く無
関係とも言えないような妙な事件がありました。

石濤の絵が一点、突然舞い込んで来ましてね。これには驚きました。なかな

かいい絵なんです。石濤は日本人好みで、日本にもかなりの数の石濤が入っていると思いますが、私のところによって来たものは、その中で第一級のものと言えるかどうかは判らないにしても、まあ、上の部に入るものでしょうね。以前から日本に入っていたものか、新しく入って来たものか、その点は判りません。新しく日本に入って来るということはちょっと考えられませんから、以前に日本に入っていたもので、所蔵家の土蔵の中にも長く眠っていたものが、商売人の手に渡り、それが私の家に舞い込んで来たのでありましょう。

問題はその舞い込み方なんです、昨年の三月の初め頃、何かの集りが都心のホテルにあつて、それに出席した帰りに銀座の酒場を二、三軒廻つて帰宅してみると、応接間の卓の上に、大きな風呂敷で包まれたものが置いてあります。すぐ軸物と判りました。

何分夜半を過ぎた遅い時刻で、家人は既に寝室に入っております。いかなるものか見当はつきませんが、とにかく風呂敷包みを解き、古びた軸の箱を開け、箱の蓋に書かれている文字に眼を当てました。「石濤、湖畔秋景」と認められ

てあります。すぐ内容品なかもみを取り出ししました。なるほど石濤です。すぐには真偽のほどは判りませんが、いずれにしても、一見して石濤と思われるものです。

応接間には軸を掛けるところがありませんので、それを持って、書齋と寢室をかねている隣室に入り、その廊下の壁に掛けてみました。蕭条落莫しょうじょうらくぼくたる湖畔の荒磯が、石濤らしい筆致と風韻で描かれています。

私は画幅を箱に収めると、すぐ寢床の中に入りましたが、なかなかいま眼にした湖畔の荒磯の風景が眼から消えません。それで、もう一度寢床から離れて、再び軸を箱から取り出すと、先刻のように廊下の壁に掛け、その上で台所に出向いて行きました。そしてウイスキーの瓶と、グラスと、冷蔵庫から取り出した氷の欠片とを一緒に運んで来ました。

廊下の椅子に腰を降ろし、ウイスキーの水割を飲みながら見る石濤は、なかなかいいものでした。湖畔とありますが、石濤の住んでいた揚州の附近となると、湖は太湖ということになりましたか。誰が持って来たか判りませんが、これについて文章を書けという依頼か、あるいはこれを適当な価格で引き取っ

てくれということであろうかと思いました。いいものではあるが、今のところ引きとる余裕はないと、そんな思いに揺られながら、石濤の絵と対むかい合っていました。久しぶりに良夜とでもいいたい夜の過し方を味わい、夜の更けて行くのもいっこうに気になりませんでした。

そう、そう、その頃はもうアレルギーに悩まされ始めていたのではないかと思えますね。いや、まだだったかも知れません。アレルギーの症状が現われ出したのと、石濤が舞い込んで来たのと、どちらが先きか、——まあ、大体同じ頃ではなかったかと思えますね。

それはさておき、翌朝、家人に石濤の軸のことを訊いてみましたが、誰もそれについて知っている者はありませんでした。そう言えば、田中さんがお玄閣で何か受け取っていたようでしたわね、と、僅かにそんな答えを、家内の口から得ただけでした。

田中さんというのは、午後だけ働きに来てくれる若いお手伝さんです。その田中さんが姿を見せた時、まっ先に軸について訊いてみたのですが、ああ、あ

れですか、月曜日に取りに来るので、それまでに見ておいて下さい、そう言つて置いて行きました。七十ぐらいでしょうか、背の低い痩せた人です。彼女の口から出たのは、これだけでした。その人が商売人であるか、素人であるか、その答えを田中さんに求めるのは無理でした。石濤の持参者は月曜日に取りに来ると言つて出て行つたとのことですが、その月曜日には三日ほどありました。その三日の間に何回か、石濤を取り出して、家人にも見せましたし、客にも披露しました。

ここまでは別にどうという話でもないのですが、いつまで経つても石濤を預けて行つた人物が姿を見せないとなると、これは一つの事件になります。田中さんの言う背の低い痩せた老人なる人物は、約束の月曜日はおろか、十日経つても、一カ月過ぎてても、いっこうに姿を現わしません。

石濤が舞い込んで三カ月ほど経つた頃から、それは私にとつて、多少荷厄介になりました。なにしろ預りものが預りものだけに、時には厄介なものを押しつけられている、そんな氣持にならざるを得ません。一体、こういう物を他人

の家に投げ込んでおいて、いつまでも取りに来ないとは失礼千萬な話ではないか、こう詰問してやりたいんですが、肝心の相手が居ないので、暖簾に腕押しというものです。

多少酒気を帯びて帰宅した夜など、書齋の書棚の一番上の段に置いてある石濤の軸の箱が眼に入ってきて来ると、その預け主に腹立たしい思いを持ちながらも、妙にその箱を開けたくくなります。石濤の軸を書齋の廊下の壁に掛けて、それに合い合っている、心が和むというか、いらいらした気分がなくなつて、いつまでも付合っていたいような気持ちになります。その荒涼たる湖畔の風景には、七十代の人間の心をそのまま引き取り、揺すぶってくれるものがあるんですね。そういう時、背の低い痩せた老人のことも、一度は頭にのぼつて来ます。暑い夜でしたから、八月に入つて間もない頃のことだつたと思います。私は老人に何か盆の供養でもしてやらねばいけないのではないか、そんな思いになつていました。と言うのは、その頃、私は自分勝手に老人は既にこの世にないといふ、そういう推定を下していました。老人は私の家に来て、石濤の軸の入つた